

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程	修了年度	2022 年度
氏名	巻田 志乃	指導教員 (主査)	小野寺 敦子

論文題目	育児が母親の自己成長に及ぼす影響 —育児ストレス、被養育体験とエゴ・レジリエンスに着目して—
------	---

本文概要	
<p>【問題・目的】厚生労働省（2022）によると、2021 年のわが国の合計特殊出生率は 1.30 であり、少子化が問題となっている。要因として、晩婚化による未婚率の上昇、ストレスの増大などがあげられる。佐藤・菅原他（1994）によれば、育児ストレスの長期化が母親の精神状態を悪化させていることが示されている。また、南（2013）は親から受容されずに成人すると、母親になった時に強い「育児に対する当惑感」を強く抱くようになると述べている。一方、育児を通して親である自分自身も成長・発達すると柏木・若松は（1994）は指摘している。また小野寺（2008）の研究では日々の小さな出来事やストレスに対して柔軟に自我（エゴ）を調整しうまく対処し適応できる能力とするエゴ・レジリエンス（Block, 1965）の高い母親ほど子育てに自信をもち精神的にも安定していることが示されている。本研究の目的は、育児による母親の自己成長を、育児ストレス、被養育体験とエゴ・レジリエンスの観点から検討すること、さらに、育児ストレスと関連があるとされているソーシャル・サポートが育児ストレスや被養育体験、エゴ・レジリエンスと母親の自己成長との関連や影響もあわせて検討し、母親の自己成長に及ぼす要因の仮説モデルを検証する。</p> <p>【方法】1) 調査対象者：末子が小学生以上の母親 300 名 2) 調査時期：2022 年 8 月 3) 調査内容：スマートフォン、パソコンを用いた Web アンケート調査①親の発達項目（柏木・若松, 1994）49 項目 4 件法。②Ego-Resiliency 尺度(ER89)日本語版(畑・小野寺, 2013) 14 項目 4 件法。③多面的ジェネラティビティ尺度(串崎 2005)を高橋(2020)において因子分析した結果得られている「世代継承的感覚」10 項目 4 件法。④青年期養育尺度 The Parenting in Adolescence Scale (PAS) (内海, 2013) 15 項目 4 件法。⑤PSI-SF 育児ストレスインデックスショートフォーム(荒木・兼松・横沢・荒屋・相墨・藤島, 2005) 19 項目 4 件法。⑥育児ソーシャル・サポート尺度(手島・原口 2003) 17 項目 4 件法。フェイスシート</p> <p>【結果・考察】母親の自己成長に対して、被養育体験、エゴ・レジリエンス、育児ソーシャル・サポートの各変数が直接、もしくは間接的に影響を及ぼしていると仮定した仮説モデルを検証した。母親の自己成長について、親の発達総得点を使用したため、「母親の自己成長」としていた従属変数を「親の発達」と名称を変更した。有意でないパスを削除し、再度分析を行った。その結果、適合度が $X^2(102) = 236.68, p < .001, GFI = .948, AGFI = .875, CFI = .952, TLI = .907, RMSEA = .039, p < .001$ であり、十分な値を得られたため、これを「親の発達に及ぼす要因のモデル」とし、最終モデルとした (Figure 2)。まず、「親の発達」に対し「エゴ・レジリエンス」($\beta = .52, p < .001$)と「夫以外相談」($\beta = .12, p < .05$)から有意な正のパスが確認され、「被養育体験受容」が「夫以外相談」、「エゴ・レジリエンス」を介して、「被養育体験心理的統制」が「エゴ・レジリエンス」を介して間接的に影響を与えていることが確認された。エゴ・レジリエンスが育児を通して柔軟性や、自己の強さ等に影響を及ぼし、夫以外に育児の話や相談ができる人がいることが、視野の広がりや人生観等の、親としての成長につながると推察される。母親のサポートは育児ストレスをはじめとする状況や被養育体験などの経験、エゴ・レジリエンス特性等、個人に合わせた個別のサポート体制が重要であること確認された。個人に適したサポートが、母親の精神的健康をよりよく保ち、母親の自己成長を促進していくと考えられる。</p>	